

大学病院における園芸ボランティア活動を 基盤としたコミュニティの形成

森村 洋子(園芸研究所)

はじめに

科学技術を駆使した効率優先の前世紀をふり返る時を迎えている。「これからは予測がつかないほどの変化の大きな時代がくるであろう。それらを受け入れて果たして平穩に暮らしていけるのだろうか。」と、人々が不安を抱いたことにある種の懐かしさを覚えるような“閉塞感”に覆われている昨今、今度は“保守主義への回帰”を唱える声も聞かれるようになった。今、品格や公德心が声高に叫ばれるのなら、まず、それらを培う土壌づくりにじっくり目を向ける必要があるのではないだろうか。

園芸とひとことで言い表される“植物と、それを育てる人と、育てられた花を観る人との間で交わされるいのちの触れ合い”には、このような土壌づくりに相応しい、時代を超えた普遍的意味がある。

園芸を社会生活に活かす道を模索して、2002年に開始した大学病院における花壇づくりの市民活動は、今、種子から育てる栽培技術の共有化とともに、育てる人々と観賞する人々との間の好ましい関係の確立が重要な課題になってきている。「園芸による好ましいコミュニティづくり」をめざしながら、ここでは園芸の特質がこの課題にどのように活かされるかを考え、あわせて園芸によるコミュニティづくりの足がかりとなる事例について報告する。

1. 大学病院における園芸ボランティア活動

ー開始期から現在までの歩みー

2002年3月、東海大学医学部付属病院 小児慢性疾患患者家族宿泊施設「かもめの家」(神奈川県伊勢原市粟窪4-1)に、園芸によるボランティア活動を志す市民(恵泉女学園卒業生およびその関係者を含む)14名によりボーダー花壇(20 m²)を制作した。施肥、灌水などの日常管理を行いながら、季節ごとに花苗を植え替え、翌年の春までに約15種、約800株の草本植物を栽培した。

2003年度は、とくに春花壇の制作に力を注いだ結果、カンパニュラ、アグロステンマ、カリフォルニアポピー、ネモフィラ、フロックス、バコバなど15種、約300株の花々が咲き揃い、ボーダー花壇の基礎を築いた(「園芸文化」第1号、2004)。

2004年度は1年を通して高温による気候異変に見舞われ、栽培・管理が困難であったが、この気象条件を活かして高温下でも花勢を保つ植物種について実地に学ぶことができた(「園芸文化」第2号、2005)。さらに秋には念願であった「種子から花まで」の自主管理体制をスタートさせ、近隣農園の協力を得て、10月中旬に温室内で15種の植物の播種・育苗を開始し、1ヶ月後には12種の苗を花壇に定植、霜除けのために不織布で覆い、新しい春に備えた。その結果、2005年春には事前の設計に基づいた配置、配色の、デザイン性の高い花壇を完成させることができた(「園芸文化」第3号、2006)。

2005年度は 1)「種子から花まで」の完全自主管理をめざして、播種、育苗のための施設を確保すること、 2)この園芸活動の当初からの目的である、病院花壇を基盤とした幅広い人的交流への第一歩を踏み出すことを目標に掲げた。その結果、年度内に播種、育苗のための用地借用の目処が立ち、さらに園芸ボランティアはそれぞれの事情にあわせて、新たに、花壇に集まる園芸ボランティア以外の人々との交流を始めた。この年度の花壇制作は前年度に倣い進めたことにより、大きな支障もなく、翌春の開花期を迎えることができた。完成した「2006年春花壇」を図1に示す。

また、栽培に関する自主管理体制の確立をめざして、施設の整備を図っ

てきた結果、2006年秋にはこの新施設において播種・育苗を開始することができた。しかし、前年度までの環境の違いから植物種によっては生育状態が思わしくないものが現れ、従って新施設での育

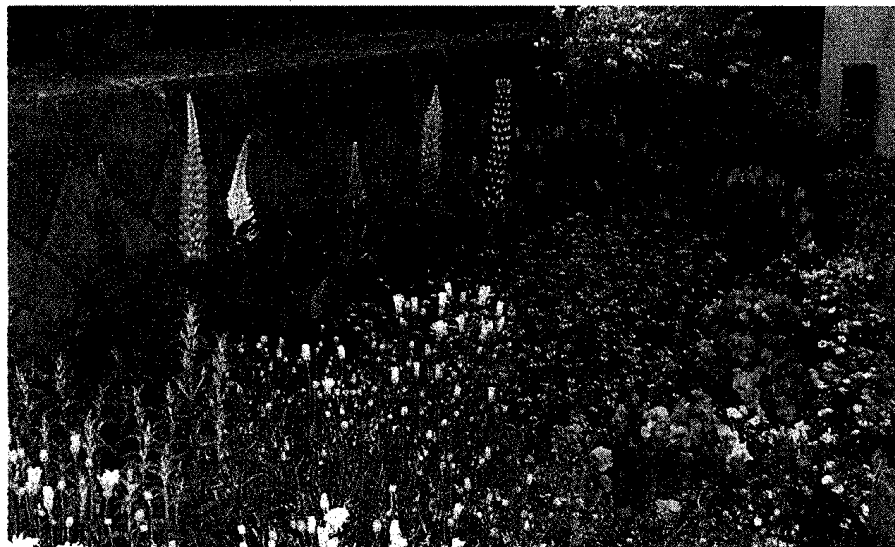


図1 東海大学病院「かもめの家」春花壇(2006年5月)

苗法については、現在はまだ、試行錯誤の域を脱していない。さらに、この時期には大学病院において花壇用地の拡張工事が行われ(大学病院の移築に伴う用地拡張、20 m²花壇が加わり、延面積40 m²となる)、そのために園芸活動にも新たな計画とその実施が必要となった。

このように現在、園芸ボランティアは、ボランティアとしての自覚や栽培技術の習得の面では一定の水準に達しているが、その一方で、活動の前進に伴うさまざまな状況変化への対応という面で新たな課題を負っている。同時に前年度から開始した、園芸活動を越えたさまざまな立場の人々との交流も徐々に進みつつある。いずれも急速に大きな成果を期待することができない課題であるが、その中で、関わっている人々は、次第に相互理解の姿勢や他者への感謝の思いを強めているように感じられる。このことが園芸とどう結びつくかを今後、注意深く見つめていきたい。

2. 園芸の特質とそれらの園芸ボランティア活動への導入

園芸によるボランティア活動を開始して1年を経た頃、ボランティアに対して活動の意義を問うアンケート調査を実施したところ、「花の美しさ・生命力から感動が与えられること」に意義を感じるという回答が最も多く、ボランティア活動本来の目的であった「他者を理解し、支え励ますこと」という回答を凌ぐ結果を得た(「園芸文化」第1号、2004)。このことから園芸

によるボランティア活動では、園芸をボランティア活動という枠内に閉じこめて捉えるのではなく、むしろ、ボランティア活動の中に園芸のもつ独自性を十分活かしたいと考えた。そのためにまず、園芸とは何かをあらためて問い直し、その結果、園芸を「植物の生命の営みの一つひとつに寄り添いながら、自然美の享受と科学的知識の探求と労働に即した技術の習得を同時に行う“総合的活動”」と定義づけた。生命の営みには、生命力の逞しさのほか、生きものとしての多様性(色彩、形態、大きさ、生長速度の違いなど)や生命の有限性(死の必然性)という要素が含まれ、このような生命現象のすべてが、植物との深い接触を通して、関わる人々が抱く人間の生命のテーマと重なり合う。また、花の美しさは、単に色彩や形態からのみ感じられるものではなく、前述のさまざまな生命の営みとあわせて考えたときに一層深く人々の心に染み入るものになるのであろう。

これらのことを考慮に入れながら、園芸によるボランティア活動のあり方を模索し、その結果、「活動の動機づけ」「活動への関わり方」「活動を支える基礎学習」という3つの観点から、園芸ボランティア活動における具体的目標を設定した(表1)。

表1. 園芸ボランティア活動における目標

| 項目 | 目標 |
|----------------|--|
| 活動の動機づけ | <ul style="list-style-type: none"> ・他者への働きかけの意思表示(社会貢献) ・生命体としての植物育成への関心(愛育心) ・園芸の学びへの意欲(栽培知識・技術習得) |
| 活動への関わり方 | <ul style="list-style-type: none"> ・主体的であること ・継続的であること ・全過程に関わること(土作り・播種から採種まで) |
| 活動を支える 基礎学習 | <ul style="list-style-type: none"> ・花の美しさ(芸術性)に対する学び ・花の生命力(科学的事実)に対する学び ・ボランティア活動の今日的意味の把握 |

現在のところ、表1に示された目標のうち、「活動の動機づけ」については概ね、ボランティア全体に浸透していると思われる。

しかし、「活動への関わり方」においては、ボランティアとしての活動期間が長くなるにつれて次第に個人差が大きく現れる傾向が見られる。ボランティア活動への意欲は明確に持ちながら、実際の活動となると足が遠のく場合を考えると、そこでは労働に対して、これまでの長い間に刷り込まれた「経済性の追求」という目的が、同じ労働から与えられる「心の充足」という目的を押しつけてしまっているように思われる。その結果、ボランティア活動には“無理をしてまでも参加しない”という選択がなされるのであろう。ここに一般的に言われるように、ボランティア活動の社会への浸透・定着の鍵があるように思われる。今後、ボランティア活動を通して人間的成長を図るという“生涯の目的”を、多くの人々が共有する社会へと変化していくことが望まれる。

「活動を支える基礎学習」については、本来、ボランティア活動を質的に向上させ、活動の継続を促す原動力になるはずのものであるが、直接的な活動からは離れたものであるために、ボランティア全体がこれらを一様に理解することが困難な面もある。従って、地道に活動を重ねながら、ボランティアの中により深い学習への機運が醸成されるのを待つことになるであろう。それと同時に個々の学習項目について、実践的で取り組みやすい方法を編み出していくことも、ボランティア活動の一層の充実のために必要である。とくに学習項目のうち、「ボランティア活動の今日的な意味の把握」は、園芸に限らず、あらゆるボランティア活動において、今後、重要な課題となるであろう。ここに記す「大学病院における園芸ボランティア活動」の目的を、園芸活動そのものに限定することなく、園芸を通して行い得る、幅広い人的交流にまで発展させようとしたことも、ボランティア活動の今日的意味を園芸との関わりの中で深く追求したいと考えたためである。

3. 園芸による好ましいコミュニティづくりのために

—目標と目標達成をめざした事例報告—

社会貢献の典型とも言えるボランティア活動への関心は、日本では1995年の阪神・淡路大震災を契機としてそれ以降、次第に高まりつつある。さらに現在は“団塊世代”の定年期を間近に控えていることから、高齢期を心身ともに健康的に過ごすためにボランティア活動に参加しようとする傾向が強まっている。このようにしてボランティア活動の社会への浸透が進むことにより、ボランティア活動を巡る議論は今後ますます盛んになり、それとともにボランティア精神の本質を捉えた、内容の豊かな活動が社会全体で展開されることが期待される。ボランティア活動は個人の意思に基づく行為であり、それを通して活動領域内で他者の生活を改善し、関わる者相互の心を満たし、質の高い幸福を求めることができるが、それと同時にそこで行われる人的交流は、信頼に基づく共同体としてのコミュニティの形成を促すことになるであろう。これは今、この時代が要請する、重要な社会的課題であることを心に銘記したい。

園芸によるボランティア活動を志す市民が集い、東海大学医学部附属病院 小児慢性疾患患者家族宿泊施設「かもめの家」にボーダー花壇を制作し、播種、育苗から日常管理までを担う中で、活動当初からこのボランティアグループがめざしてきたものは、病院という場に相応しい、心和む、美しい花壇を作り、観る人々に安らぎや喜びを与えることと同時に、花壇制作を通してその場所に集まるさまざまな人々が、相互に信頼に基づく人間性豊かな交流を図ることであった。美しく彩られた花壇は、多くの人々を集めることができる場所であるが、とくにその場所が大学病院内の宿泊施設であることから、そこには患者とその家族、医療関係者、病院内で活動する他のボランティアグループのメンバー、さらには近隣の市民など、立場や状況の異なるさまざまな人々が立ち寄り、会話を交わすことになる。園芸ボランティア活動を行いながら、他者を理解し、時に励まし合い、支え合い、学び合い、新たな信頼関係を結ぶことが期待できる。そこで活動開始から3年目にあたる2005年度に花壇に集うさまざまな立場の人々との交流を積極的にとり

入れ始めた。現在のところ、目標の達成には至っていないが、園芸によるボランティア活動がどのように園芸を超えた活動にまで及んでいるかを事例によって示したい。また、その中で園芸の特質がどのように活かされているかということにも言及する。

1) 「かもめの家」患者・家族支援ボランティア活動への参加

おもに小児がんの治療のために日本全国から病児とその家族が集まり、1～6ヶ月間滞在する東海大学医学部附属病院 小児慢性疾患患者家族宿泊施設「かもめの家」では、そこでの生活を側面から支える約30名のボランティアが常に活動している。活動は施設における日常生活の支援、病院との連絡、相談相手・談話などによる精神的支援など多岐に亘っているが、その中でとくに重視していることは、闘病者同士の交流を図ること、言い換えれば各地から病気治療という共通の目的のために来院し、施設を利用している患者とその家族が互いに情報を交換し、支え合い、励まし合う場を提供することである。この目的を叶えるために、毎週1回、施設内でボランティアが用意した昼食を関係者がともにする機会を設けている。施設に隣接した花壇で活動する「園芸ボランティア」は、現在、交代でこの「昼食会」に参加し、患者・家族の話に耳を傾け、他のボランティアグループの活動を知る機会を得ている。また、同時に花壇や園芸活動に対する評価、要望を受けとめ、日常の園芸活動とは異なる有意義な時を過ごしている。患者とその家族、他のボランティアグループのメンバーと園芸ボランティアとが互いに信頼し、協力し、「かもめの家」における闘病生活がよりよいものになるように考え合い、和やかに語り合うことが“無私の心”の安らぎを与えている。このような語らいは、ときに花壇を前にして行われるが、それは花々が人々の心に平等に何かを語りかけてくると感じられる、豊かなひとときでもある。

今年度は「かもめの家」に滞在された患者の中に、治療の甲斐なく亡くなった方がおられた。この知らせに深い悲しみを覚えながら花壇の植物と向き合ったとき、植物の生命への慈しみが一層強まるのを感じた。どの生命も有限であり、それゆえにどのようなときにも生命を尊重すること、そ

れ自体が“生きる”ことであることを改めて知らされた、重大な出来事であった。

2) 「かもめの家」患者・家族およびボランティアによる談話会への参加

「かもめの家」では、毎月2回、夜間に施設に滞在する患者とその家族およびボランティアとが打ち解けて語り合う「談話会」を開いている。この時は「昼食会」と異なり、少人数のボランティアが時間をかけてじっくりと患者やその家族の話聞き、必要事項を後日、病院に連絡したり、施設での生活をより安心できるものに改善したり、また、患者や家族の体調管理についてともに考えたりする、きめの細かい対応がなされる。ときには小児がん治療に関する新しい情報が医療関係者から伝えられ、支援のあり方について理解を深める場が与えられることもある。この「談話会」への参加も、日頃の園芸ボランティアと施設内ボランティアとの協力態勢の中から自然な形で始まり、現在に至っている。

3) 病児家族支援組織NPO「ファミリーハウス」との交信・文書交換

「かもめの家」における病児家族支援活動は、1992年に国立がんセンター中央病院(東京都中央区築地)において、同様の趣旨による支援活動が開始されたことに端を発している。国立がんセンター中央病院を拠点とするこの活動はNPO「ファミリーハウス」(東京都千代田区東神田に事務局を置く)と名づけられ、現在まで15年間、ボランティアによる活発な支援活動が続けられている。その活動に共感する人々を通して、病児家族支援活動は全国的な広がりを見せ、東海大学医学部附属病院においても2000年に施設が建設され、活動を開始した。

このような関係から、NPO「ファミリーハウス」の活動状況は、定期的な通信により継続的に「かもめの家」伝えられている。今年度はとくに、NPO「ファミリーハウス」の活動が15周年を迎えることを記念して、創設以来の活動記録書「病院近くのわが家をつくる/ファミリーハウス15年の歩み」が出版され、この出版物を通してさらに深くその活動状況を知り、山積する課

題や問題解決へのとり組みについても学ぶことができた。この機会にNPO「ファミリーハウス」のボランティアとの交信も行われ、情報交換とともに活動へのインセンティブを一層高めることができた。同類のボランティアグループとの交流は、活動に直接的な刺激を与え、活動の大きなエネルギー源となることを実感した。

また、同時に他の患者・家族支援ボランティアグループや医療関係者からもこのような活動への、園芸の導入の希望や必要性が伝えられ、今後は医療施設や患者・家族の滞在施設などでの“闘病生活の質的向上”(improvement in quality of life fighting disease)をめざした園芸活動にこれまで以上に関心が集まるのではないかと思われた。このような園芸活動は、いわゆる「園芸療法」とは目的を異にするものであるが、闘病生活あるいは医療活動の間に美しく彩られた花壇を愛で、自然が表す生命の力に触れることには、それにより人間性が呼び覚まされることが十分に期待できる。

4) その他の活動

大学病院における園芸ボランティア活動の開始から4年目を迎えた今年度は、活動の目的とこれまでの成果を明らかにするために「人間・植物関係学会(2006年6月岡山大学において開催)」において学会報告を行った。また、活動を紹介する講演活動は、次の主催により3回実施した。

- 1) 川崎市環境局主催(2006年6月)
- 2) 川崎市園芸協会主催(2006年8月)
- 3) 宇都宮市都市開発部主催(2007年2月)

これらの活動を通して、「かもめの家」における花壇制作活動の紹介を行うとともに、他大学、他団体およびそれぞれの地域における花壇制作による園芸ボランティア活動について、さまざまな情報を得る機会を得た。

さらに、東海大学病院が主催する院内交流会(東海大学病院納涼祭、2006年7月)にも参加した。

このようなさまざまな形での他者・他団体との交流は、それぞれに相応の時間を要するため園芸活動の効率を低下させるようにも感じられるが、し

かし、それらは四季の変化に応じた、きめの細かい花壇制作の目的を一層、明確にし、活動へのエネルギーを増し加えることにおいて役立った。このような交流の積み重ねは、今後、園芸活動に基づくコミュニティ形成の上で有意義な体験として活かされるであろう。交流の状況を表す文書、出版物、写真などを図3に示す。

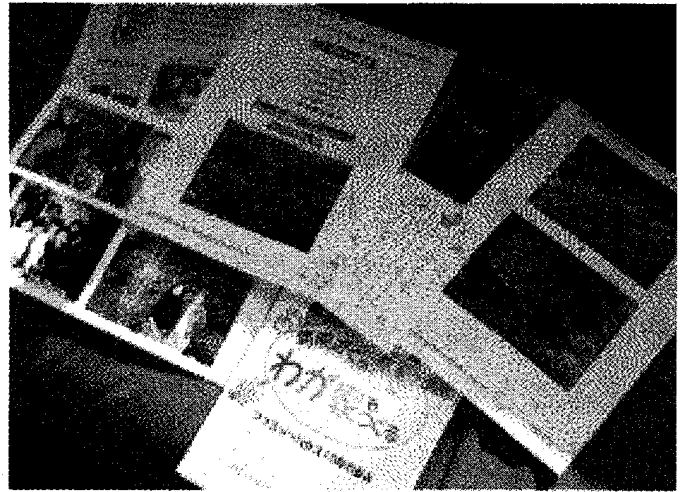


図3 園芸による人々の交流
(文書、出版物、写真など)

まとめ

世界一の長命を誇る日本では、今、高齢期、とくに定年後の生き方を意味あるものにしたいという願いから、ボランティア活動への関心は急速に高まりつつある。ボラ

ンティア活動は自発的な行為であり、意思があればすぐにでも始められる“入りやすさ”がある反面、それを意義深いものとして長く継続させることは必ずしも容易ではない。ボランティア活動の捉え方や活動へのとり組み方が社会全体として現在まだ成熟の途上にあるためであろう。

その中で最近、私たちのまわりでは、近年の行き過ぎた「個人主義」を批判するところから「保守主義への回帰志向」が見られる。それは見方によれば、伝統と秩序を重んじるために体制の枠の中で人間をもう一度“成形しなおそう”とすることのようにも感じられる。しかし、今、必要なことは、これまでの科学や科学技術のめざましい発展によってもほとんど変わることのなかった人間の内面を、もう一度見つめなおし、見失われつつある人間本来の姿を「人間観」として捉え直すことではないだろうか。その中で社会の秩序や個人の幸福についてあらためて考えることが求められているように思う。

一般にボランティア活動がその究極においては、活動者個人の精神的充実を超えてコミュニティの形成をめざす理由もこのことと重なるはずである。アメリカの社会学者、アミタイ・エツィオーニは「コミュニティの中での人々のつながりが利己的な考え方を排し、人々の中に共通善 (common

good)と公共善(public good)を実現し、そのようなコミュニティの文化が人格形成に重要な役割を果たす」と説いている。孤独を避け、人々の間で他者のために働くことを自分の喜びとするボランティア活動が社会に根づくまでにはまだ、多くの時間を要するであろうが、仲間とともに歩む、そのような人間性確立の過程そのものがまた、豊かな時であるとも言えよう。

園芸は植物の生命と直接的に向きあう行為であり、そこでは誰もが、花が表す美の享受とともに生命の、集団としての連続性にも、個としての有限性にも触れ、また、生命が本来的にもつ多様性にも絶えず接することになる。その結果、園芸活動を通して科学的事実を人間社会の文化に重ね合わせて考えることも、また、文化的土壌を科学的に掘り下げてみようとすることも比較的容易になり、このようなことから生活をより味わい深いものとして根底からつくりあげることが可能になるであろう。

恵泉の園芸教育が、その目的を単に園芸の知識や技術の習得に止まらず、園芸を手段とした人間形成においていることは、創設当初からその発想においてすでにこのような科学と文化の融合の領域にまで踏み込んでいることを表している。

ここに報告する「大学病院における市民ボランティアによる園芸活動」においても、園芸へのこのような視点を重視したい。そして今後、活動を通してより高い市民性を培い、関わる人々が相互に恩恵に浴し、心を満たすコミュニティの形成へと、地道に歩を進めていきたいと願っている。

参考文献

1. 森村洋子. ボランティア活動における園芸の特異的役割. 園芸文化第1号. 72-75. 2004.
2. 森村洋子. 大学病院における園芸ボランティア活動の実態と改善点. 園芸文化第2号. 138-144. 2005.
3. 森村洋子. 大学病院における市民園芸活動を通して考える園芸の役割と可能性. 園芸文化第3号. 138-150. 2006.

4. 特定非営利活動法人ファミリーハウス編 『病院近くのわが家をつくる/ファミリーハウス15年の歩み』 特定非営利活動法人ファミリーハウス.2006.
5. アミタイ エツィオーニ (小林正弥監訳, 公共哲学センター訳).『ネクスト』 麗澤大学出版会.2005.
6. 中野剛充.『テイラーのコミュニタリアニズム 自己・共同体・近代』 勁草書房.2007.